日本プロレタリア文学集・2

日本プロレタリア文学集・2

初期プロレタリア文学集 2

日本プロレタリア文学集・2
初期プロレタリア文学集 (二)
定価 二六〇〇円
一九八五年五月二十五日 初版
発行者 松宮龍起
発行所 株式会社 新日本出版社
〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三二〇—七一一一
振替 東京 三—一三六八一
印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

第十一回配本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします.
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください.

日本プロレタリア文学集・2

初期プロレタリア文学集 (二)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

徳永保之助

新戦場……九

鉛毒……一三

平沢計七

石炭焚……二七

死……三三

赤毛の子……三七

孝行……四〇

御主人様……四四

金貨の音……四八

二人の中尉……五〇
暴風雨の前……六二

伊藤野枝

転機……八五
火つけ彦七……一一九

平出修

逆徒……一三五

荒川義英

廃兵救慰会……一五九

沖野岩三郎

山鼠の如く……一六五

細田民樹
初年兵江木の死……一九三
或兵卒の記録……二三八
凱旋……三五一
藤森成吉
盗人……三七七
ある体操教師の死……四〇二
脱走者……四一〇
解説……祖父江昭二……四三五
発表年月日と掲載文献……四五五

德永保之助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

新戦場

すべてはモウ絶望である。××連隊から派遣された三箇小隊ばかりの兵士が、ストライキの現場へ着いた時には、すでに、労働者等の渦巻く暴風雨のような怒りは、警察官との間のはげしい闘争にかわっていた。彼等は互いに、兇器を以て血を泥土の上にそそいだ。しかし、武装せる兵士を見て、労働者等はその姿を消したか、或はその威容に打たれて、兵仗の前に平伏したか。否、彼等はさらにその憤怒を新たにし激烈にし、強力なる戦意を奮い起して猛撃した。

この兵士の中の一人の無智な男の身の上とその行い、それはこの少数の中の他の者の上にも起った事柄であるかも知れない。否、それは他のみんなの身の上をあらわしているのだ。実際、彼れがその一隊の中に加えられたと云う事は、彼れにとってこの上も無い不幸な事実であった。その不幸は彼れの頭にチラとひらめいた。彼はぼんやりそれを預知した。彼れは心配し始めた。彼れの唯だ一ツの心配、——彼れが労働者の暴挙を鎮圧するために、他の兵卒と共に、その隊長に率いられて兵営を出てから、現場に到着した後までも、彼れの頭の中をかけめぐる唯だ一の心配、それは彼の父がその暴徒の中に加っていはしないかと云うことであった。彼れの父はその鉄工場に通っていたのだ。

「どうかお父つぁんだけは仲間入をせずに、無事でいてくれるように！」

彼れは心に祈った。彼れは考えた。

「若しお父つぁんがその中の一人であれば、ひょっとして俺はお父つぁんに出ッくわすかも知れない、そして隊長はお父つぁんに向って俺に発砲を命じるかも知れない。俺はお父つぁんを殺さなければならないか。イヤ俺にはそんなことは出来ない。誰だってそんなことが出来るもんか、あかの他人に対してさえ、恨みも無いものに、そんな事は出来ない。こんな場合、俺達は同じ国民を傷けるためにあるんじゃない。そんな権利も義務も決してあるものか。しかしこんな事はどうして起るんだ？　一体俺達のこうして働くのは誰れのためだ？　誰のためだ？……イヤ、こんな事

を今考えちゃいられない。……どうぞお父つぁんが無事でいますように！」

彼れは熱心に祈った。彼等は進んだ。彼も進んだ。彼は見た。その光景は戦争と隣り合いである。市街戦に似て、全くその性質を帯びていた。彼れの前にはすでに負傷者が二三人横わって、創口から血を吹いてうめいていた。彼れは咄嗟の間に決心した。彼れは飛び上るようにして隊伍を脱した。その時彼の名を呼んだものがあったが、それは彼れをふりかえらせもしなかった。彼れは、若しや父が工場の隅ッこに残ってやしないかと、鋳鉄部の方へ狂者のように走って行った。彼れは、少年の頃、度々父の弁当や傘を届けに来たことがあるので、広い工場内の様子をかなりよく知っていた。

暴動者は、だんだん暗くなってゆく空に、幾度か吶喊の叫び声をとどろかせた。しかしそれは徒らに貴い血と肉とを敵手の銃剣の下に投げつけ、浴せかけた丈である。兵士と警官は白刃の堤防を作って、溢れんとする労働者の暴力を支えていたが、とうとう堤塘は突破られた。乱戦！ 悲鳴と叫喚と剣戟の相触れる音は夕やみの空気をびりびりに引き千切った。多量の血潮と肉塊とは彼等お互いの胸からえぐり取られその血管から非常な勢で、惜しげも無く迸り流れた。而かも誰れもその血管の破れを縫い塞ぐものは無かった。更にはげしい悲鳴と呻吟の声が、冷たい真黒な大地に接吻した人々の口からついて出た。同胞の相互虐殺！ 許すことの出来ない人間の罪悪！

彼れはこの乱戦の中へ彼方から帰って来た。彼れは鋳鉄部で破壊された大きな鎔鉱炉や、坩堝や、大きな木型や、種々な道具の只ちらばっていたのを見ただけだ。

彼れは今偶然隊長の傍に突ッ立った。彼の前に一人の職工が、大鉈をふりかざしながら、死屍の上を、隊長をめがけて進んで来た。

「射て！」

隊長は彼に命令した。その瞬間、隊長は頭から血潮を浴びて仆れた。彼はその男をみた。そして隊長の命令にもかかわらず、また傷いた隊長を棄てて、彼は逃げ出した。隊長は彼れに、その幼時からの友人を射ち殺せと命じたのだ。

彼れは只だ疾風の如く、同胞殺戮の戦場を、死屍の上を血に辷りつつ走り廻った。

「父！」

彼れの頭の中は只それだけだ。他の事柄はすべて弾ねとばされて了った。彼れには呻吟の声も、熱血の迸出する音も毫も彼と関係の無い事件のようであった。彼れは遂に右

方の闘争場へやって来た。彼れは暫く白痴のように只だウロウロしていたが、

「オオお父つぁん！」

彼れは飛び跳ねて叫んだ。彼れの父は彼れの前に仆れていた。その傍に一人の兵卒が仰向けになって、共に倒れていた。

「お父つぁん！　お父つぁん、俺だ。」

彼れは父を抱き起した。彼れは幾度か父を呼んだ。しかし彼れは終に覚えず父をその膝から落した。彼は致命傷を受けたものの如く、バタリそのからだを父の死骸の上に投げて倒れた。そして暫くはかすかな戦慄の外、身動きもしなかった。と、イキナリ彼れは、不思議な神霊の感応によって蘇生したように突ッ立ちあがった。

「俺のお父つぁんを殺した奴は誰だ？」

彼れは父の殺害者を求むるが如く、死者の周囲をかけめぐった。そしてステキな勢いで彼方へ走り出したが、直ぐ又父の死骸の傍へ帰って来た。彼れはそこにぼんやり突っ立って、

「とうとう俺はお父つぁんを奪られて了った、俺は天にも地にも一人ぼっちになっちまった！　畜生！　俺のお父つぁんを殺した奴は誰だ？　殺せと命令した奴は誰だ？……ああお父つぁん！」

彼れは発作的にかく叫んで、父の死骸の上にからだを投げた。

やがて彼れは血の中に起き上って、膝で身体を支えた。彼れは静かに銃口をその咽喉部に充てた。

この時、彼方の大きな建物の一角から、太い火炎が黒けむりと共に吹き上った。そして其の火焔を見るや、魔鬼の群れのさらに多量の血を欲する叫喚の声が、将に死せんとするものの呻きを圧して捲き起った。

火は建物を全く包囲し尽した。彼はその燃え猛けたる巨身の赤熱の輝きを以って、相共に残害し、虐殺されて、貴き血潮にまみれた同胞の死屍を、ありありと人間の前に照らし示して、彼等の反省を求めた。

鉛毒

一、教師と一生徒の論争

流血をさえ伴ったあの好もしからぬ場合へ、たとえ自ら求めてやったことでないとは云えわざわざ入込んで彼等が行ったとは！　何とてそんな役目を彼等は負わねばならなかったのであろうか。実際それは悪い考でも、遣り方でもなかったろう、若し平穏無事な、通常の時でそれがあったなら。が併しほんとに場合がよくなかった。

兎に角、運命から荷わされた此不吉な役目を果そう為の手順として、ある日、築地河岸の××工芸学校では、そこの製版印刷科中、初等を除く活版印刷の生徒全部が、授業開始に先って、階下の広い大教室に集められた。軈て主として実習受持のN――と云う教師がコトコトと教室に入って来た。彼は肩の辺りの薄茶色にやけた背広を着て居たが、高い弧線を描いた猫背がそれを一層醜く目立たせた。両手を後で組んで、教壇の上に登り、赤い鼻先にずれかかった眼鏡を直し、さて一わたり生徒の大勢の頭の上を眺めまわした後、彼は何か喜ぶべき報告でもすると云う様な調子と笑顔で、生徒一同に向って口を切った。

「諸君、きょうは授業を一日休みます、そして……」

彼は強いてここで言葉を途切った。忽ちパチパチと拍手が一隅から起った。そして生徒達のがやがや云う中から、

「先生、なぜ休むんですか。」

早くも大声にきくものがあった。

「まあ黙ってききたまえ。」

教師にあり勝ちな、わざと落ちついた物言いで斯う云って、彼は広いガランとした教室の方々を見廻した。生徒は何かいい事にちがいないと思ったか、急にはしゃぎ立った。彼等の一寸静かになったところで、

「きょうはこれから或るところへ校外実習に出かけるのです。」

彼は語尾を強くピタリと切って、八字髭をひねくりながら、教壇の上をあちこちと歩いた。

「先生どこへ行くんですか。」
二三の生徒は同じ事を口々に叫んでたずねた。
「行く先は新聞社です。諸君も知ってるでしょう、今新聞社の活版職工がストライキしているのを。で二三の新聞社から諸君に来て仕事を手伝って貰いたいと学校にたのんで来たので、校長と吾々と相談の結果、行く事にしたのです。」
彼はいろいろな質問を次から次と生徒から浴せられたが一々それには答えずに、
「そこで直ぐ諸君は行く仕度にとりかかって貰いたい。行くものはここに集った活版科全部。ステッキ（植字架）、ピンセット、実習服を用意する事。仕度の出来次第出かけるから、校庭へ列んでくれたまえ。そこで全員を三部に分けてY――新聞社とK――新聞社とC新聞社の三軒へそれぞれ行きます。」
そうと分ったので、ざわつき乍ら早くも仕度を始める生徒もあった。
「では分りましたね。」
彼は生徒に念を押して、ユタリユタリと教壇を降りようとした。その時突然、
「先生！　一寸御聞き申します。」
こう鋭く叫んでつッ立上った一人の生徒があった。見た所他の生徒より稍や年上――二十歳位――らしかった。さして背の高くない、からだのキリッとした若者で、其の太いきつ相な眉毛の下には鋭い、感情の急な傾斜を持っていそうな、それでいて叡智の深い眼が強く光って、それが其際何にやら固い決心を示しているらしく見えた。
「又T――君が何か『猫背』と言い合うぞ、面白い面白い。」
この教師は生徒仲間から「猫背」と云う綽名をつけられていた。彼等の注意は今T――の一身に集った。
「何ですか。」
N――教師の声は殊更に厳かに強く、鋭くひびいた。T――と呼ばれた生徒は、
「吾々は必らず新聞社へ行かねばならんのですか、それとも行く行かぬは生徒銘々の自由なのですか、それを承わりたいのです。」
「そんな事は聞くまでもない、学校として承諾した以上、是非諸君に行って貰わにゃならんし、諸君にも其の義務がある。」
「ああそうですか、分りました、併し先生僕だけは除外して頂きます。たとえ行けと云っても僕には参りかねます。」

若者は昂然とこう言った。

「それは又なぜだ?」

N——教師の声は荒々しく、尖っていた。彼はT——の顔を睨める様にして見守った。大勢の生徒の前で、自分の教え児たる弱少な一生徒の反抗に会ったのを、彼は無上の侮辱を受けたと感じた。T——は臆せずにきッぱりした演説口調で、

「それは斯うなのです。僕はこの様なストライキの場合に吾々生徒が出しゃばるべきでないと考えます、如何に新聞社からたのまれたとて……。吾々は第三者です、いずれが善にせよ悪にせよ、どちらに味方するのも此際よろしくないと存じます。平生吾々は政治運動、殊に社会主義的労働運動などに立入ってはならぬと、それとなく教えられてますが今吾々が新聞社へ行って仕事をするのは、取も直さず資本家の側に立って労資の闘争に参加することになります。吾々が資本家の為に拾う活字の一本一本は、その都度労働者の頭をはり殴るにひとしいです。吾々は資本家の道具に使わるべきでありません。行けば結句職工達の怒りと憎しみを買うだけです。之れが僕の断じて拒む理由です。そして出来る事なら、学校としてこの校外実習を全部取消にされんことを希望致します。」

彼は一息にこれ丈けの事を述べ立てて席に腰を下した。先刻からヒャヒャなどと叫んでいた生徒の一部からたわいのない拍手が起った。

N——教師はと見ると、憤怒に赤くなった顔を蒼くかえて、初めの落付きをすっかり失ってしまった。

「何て言草だ、今のは! 飛んでもない。危険な社会党と君は同類だな。モウ断じて此処でそんなたわ言を並べることはならん。」

彼は口から泡を吹き、つばきを飛ばしながら突っかかりそうに言った。そして猫背を一層高く上げ、険しい目付をして、T——を押え付けるように見据えていたが、やがて生徒全体に向い、やや鎮まった調子の中に、T——を嘲る気味を交えて、

「諸君、諸君は今の一大演説を聞いたじゃろうが、決してあんな考えを持っちゃいかん、ああ云うのは危険思想の一ツだ、吾々は何も今云った様な目的で新聞社へ手伝いに行くのじゃない。校長殿も言われたが、吾々は一ツは諸君の為に校外実習の絶好機会を逸すまいと思うばかりと、一ツは一種の公共機関たる新聞紙が、職工共の自分勝手な要求を通そうとしてやったストライキの為に一日と雖も発行されないでは、公衆の生活を不安に導くことになるから、之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.